

研究ノート：後藤田純生氏のわらべうた・遊びうたの研究から見る音楽教育観

中村，礼香
鹿児島女子短期大学児童教育学科幼児音楽教育学専攻：准教授

<https://doi.org/10.15017/4776881>

出版情報：総合文化学論輯. 15, pp.101-107, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

研究ノート：

後藤田純生氏のわらべうた・遊びうたの研究から見る音楽教育観

中村 礼香

1. はじめに

後藤田は 1950 年代半ばから NHK の青少年、幼児番組の制作に携わっていたが、その傍ら、望ましい音楽教育のあり方を追求し、児童の文化環境を整える視点から、「子どもの歌」「遊び」について、様々な角度からの問題提起を行った。その中の一つとして、日本や海外のわらべうたについて多くの資料を収集し、日本の「わらべうた」の衰退を防ぐための運動や、日本と外国のわらべうたの比較研究等を行った。後藤田が日本と外国のわらべうたの比較研究を行った理由は、子どもの成長・発達に関連して、子どもたちがどのような歌でその表現技能を育て、どのような遊び方で知的能力や社会性を伸ばしているのかを調べ、これをもとにして望ましい歌唱素材の体系そしてその指導の在り方を見つけ出そうとするものであった。後藤田は外国の少年少女合唱団との付き合いを通して、外国の子どもの歌には遊びを伴うものが多いのに対し、日本の子どもの歌には遊びを伴わないものがほとんどであることに気付いた。そこで、日本の子どもたちに歓迎される素材を探し求め、日本のわらべうただけでなく、世界各国の遊び歌を収集しようとしたのであった。

本研究では、後藤田の「わらべうた」「遊び歌」に関する功績や音楽教育観を明らかにすることを目的として、後藤田の残した資料を基に文献研究を行う。

2. 日本におけるわらべうた及び遊び歌について

後藤田は、1971 年に発行された「日本の歌唱 第 4 巻 童謡集」の解説の中で、「『わらべうた』の強力な生命力は、童謡や子どものうたの歴史を検討するとき、音楽教育の方法と素材を論ずるとき、何が正しく、何がより良いかを顧みる、鏡のような存在であります。」と述べている。後藤田がわらべうたに注目した理由は 2 つである。1 つは、歌が広がるためには口から口へ伝えられていくか、他の媒体によって伝えられるかであるが、多くの歌はテレビやラジオ、レコードといった媒体が必要なのに対し、わらべうたは子どもの間で口から口へ伝えられるという手段のみで歌が広がっているところに生命力の強さを感じたことである。もう 1 つは、幼児にとって「わらべうた」は言語表現の成長のために不可欠なものであり、さらに遊びを通して心身の発育を促し、また友達のことを意識し社会性が養われていくといったように、子どもの成長過程で、幼児期に「わらべうた」の果たす役割が計り知

れぬほど大きいということである。後藤田が「わらべうた」の価値を発見し、見直そうと考えたのは、幼児の番組制作の際、「うた」と「遊び」の伴った素材を求め、かつ創作しようとしたときであった。なかなか幼児が自発的に遊ぼうとする強力な創作曲が出来上がらず、わらべうたを放送したところ、幼児の反応がとても良く、一緒に体を動かしているところを見て、歌い継がれ、改良されてきたものの強さにはかなわないと感じたようである。

上記の理由から、後藤田はわらべうたに魅力を感じ、わらべうたについて研究を深めるようになったが、同時に世界の遊び歌にも興味をもった。当時の日本には、外国から入ってきた遊び歌は「むすんでひらいて」「大きな栗の木の下で」「幸せなら手を叩こう」などの 20 曲程度であった。そこで、世界各国の遊び歌の資料を収集し、日本の子どもたちに薦めたい遊び歌を選出し、これに日本語の歌詞作りを試みた。こうした作業の中から、1974 年ごろ、「むっくり熊さん」「キャベツを植えよう」「山小屋いっけん」「ロンドン橋」「さあさあスキップしましょう」などが誕生し、これらをまとめたものとして 1975 年には「世界のあそびうた 35」（音楽之友社）が出版された。さらに後藤田は研究を通して集めた日本やアメリカやフランス、ビルマ（現ミャンマー）、フィリピン等をはじめ多くの外国の遊び歌を朝日小学生新聞にて「あそびの広場」という連載の中で紹介した（資料 1）。また、月刊クーヨンの中で「音楽広場」という連載を行い、日本や外国のわらべうたの紹介を行っている。他にも様々な雑誌等で連載を行い、世界のあそび歌や日本の遊び歌を紹介している。このように、後藤田は日本のわらべうただけではなく、外国のわらべうたについての情報発信にも力を入れていたことがわかる。後藤田は、これらの外国の遊び歌を紹介するにあたり、できる限りそれぞれの歌詞及び遊び方のオリジナルの内容を尊重することにした。子どもの発達との関連を知る上でも、国々の伝統や生活を生かすためにも重要な条件だと考えたからである。

日本のわらべうたや手遊び歌が子どもの現状に沿って変化してきていることについて、1979 年に発刊された月刊「言語」の中で後藤田は「今日の子どもたちは、昔の子どもたちとは比較にならぬほど巾の広い音楽感覚を身につけているので、この年代の子どもたちは、古い『わらべうた』のもつ、音楽的内容の単純さに満足出来なくなったことから、『アルプス一万尺』が子どもたちの間で受け入れられたのではないか。」²⁾と述べている。また、「絵描き歌」についても同様の傾向が表れていて、古い型の「絵描き歌」では、「へのへのもへじ」や「みみずが三びき」のように、ほとんどメロディらしいものが見られぬ「唱え言葉」調のものが多かったが、最近では「春が来た」やポーランド民謡の「森へ行きましょう」のメロディを借用したものに变化してきており、旋律的に多彩になってきているとも述べている。手遊びや絵描き歌に共通して言えることは、日本のわらべうた音階のものから、ヨーロッパの西洋音階による日本の童謡・唱歌のメロディが利用され、さらに外国の歌までが利用されるという著しい変化が起こっているということである。

このように後藤田の功績により、日本のわらべうたが見直されるだけでなく、外国の遊び歌が日本の遊び歌として広く普及し、さらにNHKの「みんなのうた」などを通して広まった外国の曲を用いた新しい絵描き歌等の遊びを子どもたちが作り出すようになった。そういったものが保育現場における遊び歌として浸透していき、現在でも日常的に子どもたちの間で遊ばれている。後藤田の、子どもの発達に即した遊びを伴う歌を広めたいという音楽教育観が世の中に受け入れられたと言えるのではないだろうか。



資料1 アメリカのわらべうた（朝日小学生新聞「あそびの広場」）

3. 外国のわらべうたと日本のわらべうたの比較

後藤田は外国のわらべうたと日本のわらべうたとの比較研究も多く行っている。本章では、後藤田が執筆した資料を基に、外国のわらべうたの特徴と、後藤田の分析した内容についてまとめる。

後藤田によると、日本と韓国のわらべうたは極めて近似しており、東アジア全般的に手遊びや模倣、じゃんけんがわらべうたの多くを占め、また、「勝ち負け」や「かけひき」をテーマとした遊びを楽しむ傾向にあるようだ。特にじゃんけんは、東アジア諸国で発達した遊びであることから、じゃんけんを伴うわらべうたが5～6歳の子どもが好んで遊ぶわらべうたに多く含まれているようである。また、儒教の影響を大きく受けている日本を始めとした東アジア諸国では、「男女七歳にして席を同じゅうせず」という故事成語があるように男女接触をタブー視する習慣があり、児童期から男女別に遊ぶ内容になっている。アジア圏のわ

らべうたで国によって最も異なる点は拍子である。日本のわらべうたの拍子はほとんど2拍子系であるのに対し、韓国のわらべうたは8分の6拍子などの3拍子系も入っている。また、フィリピンは、民俗芸能であるバンブーダンスがわらべうたとしても親しまれており、3拍子の曲も多く存在する。

イギリスやアメリカなどの英語圏の国では、伝承的な「わらべうた」のことを“マザー・グース”と呼び、愛唱するだけでなく、本や美しい絵本としても出版され、子どものみならず大人にも親しまれてきた。日本ではじゃんけんを取り入れた遊びが多いことがわらべうたの特徴の一つであるが、欧米諸国には鬼決めをするための「鬼決め遊び」が多く存在する。日本の「おせんべやけたかな」のような唱え言葉と手遊びを結合させた遊びで、最後の言葉で指した人を鬼とする遊びである。欧米でのわらべうたには役割の交代や複雑なルールの変化を楽しもうとする傾向が強く、勝敗や駆け引きをあまり好まないようだ。欧米諸国の遊び歌の中で著しい特徴を見せるのが、歌の進行とともに内容が少しずつ変化していくものである。日本でもよく知られている「こいぬのビンゴ」がその一つであるが、歌詞が増えたり減ったりするもの、リズム打ちや手拍子などが増えたり減ったりするものといったように、複雑なルールの変化を楽しむ遊びである。こうした遊びには、ある程度の集中力や判断力が必要で、7~8歳以上の児童が好む遊びである。また、前述したように東アジア諸国では、7~8歳を境として男女が一緒に遊ばなくなり、男児と女児で遊びが分かれていくが、欧米諸国ではわらべうたを楽しむことで若い年代の仲間との交流の集いや男女交流のダンスへ発展していく。「鬼」の交代を男女交互に行うものや、はじめから男女が一組のカップルを作り、歌の進行の中でパートナーを交代するものなどがある。後藤田は著書の中で「今日、男女が協力して幸せな社会をつくっていかうというのが教育の基本ですから、少しずつこうした遊び歌を楽しむことも有意義ではないかと思えます。」と述べている³⁾。後藤田が外国のわらべうた遊びを新聞や月刊誌等で紹介していたのは、こうした日本にはあまりない価値観の遊びが外国には存在することを紹介し、日本での遊びに取り入れられることを期待していたことも理由の一つではないかと考えられる。

後藤田は「原語で歌うー世界の子もり歌とわらべうた」のLP盤を製作し、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、ドイツの5ヶ国、10曲の子守歌や、イギリス、アメリカ、ドイツ、旧ソビエト、フランス、イタリアの6ヶ国の代表的なわらべうた18曲を収録した。その解説の中でヨーロッパのわらべうたと日本のわらべうたの比較を行っている。大きく異なる点は以下の4つである。

- ① ヨーロッパではスキップしたりジャンプしたりして遊ぶものが多いのに比べ、日本ではそうしたものが見られない。
- ② ヨーロッパでは4分の3拍子や8分の6拍子など、3拍子系の拍子をもつものが多いが、日本のわらべうたには全く見ることがない。

- ③ ヨーロッパでは円陣を作り、鬼の交代やパートナーチェンジをするものが多いのに比べ、日本のわらべうたにはそうしたものが少ない。
- ④ 世界、主にヨーロッパには7～10歳ぐらいの子どもが喜んで遊ぶものが多いが、日本にその種のものは少ない。

後藤田は解説の中で、ヨーロッパのわらべうたは、スキップやジェスチュア遊びといった「遊び」を通して8分の6拍子や4分の3拍子に馴染むなどの音楽的要素を身に付けることができ、また知的な集中力の訓練が行われると述べている。さらに、これらの「遊び」はこれらの能力の発達を促すばかりでなく、集団に参加し、集団の中の役割を分担し、そしてその秩序を守るという社会的な訓練にも繋がっており、ある年齢のところで停滞してしまう日本の古いわらべうたと著しい対象を持つものである、と述べている⁴⁾。

欧米のわらべうたは、子どもの成長・発達に従ってその表現能力と密接に関わるだけでなく、子どもの社会性の発達とも結びついている。一方日本のわらべうたは5、6歳ごろまでしか遊ばれておらず子どもの発達に長く関わることはできていない。また、日本のわらべうたは子どもの間のみで発展してきたものであるが、イギリスのマザー・グースなどは大人の側から絶えず新しい創作やアイデアを子どもの側に提案し子どもがそれを主体的な立場で受け入れ遊びを作り出してきた。後藤田は、日本の子どものわらべうたの世界に大人が介入・干渉することは好ましくないが、遊びを発展させるためには外国のように干渉することも必要ではないかと考えていた。大人が介入する手段の一つとして、小学校の音楽学習においてわらべうた遊びを含む「歌遊び」をより多く取り入れる、小学校で総合学習として「歌遊び」を見直す、親に「歌遊び」が子どもたちの成長に役立つことを気付かせるといったことが必要であるという考えを持っていたようである。

4. 後藤田の音楽教育観についての考察

後藤田は、1997年に執筆した「幼児の歌と遊び」という原稿の中で、歌と遊びの指導法について述べている。まずは幼児が綺麗な声で歌うためのポイントである。子どもに無理に歌わせないこと、保育者自身が楽しく気持ちよく歌うこと、一斉歌唱ではなく少人数で保育者と子どもが顔を見合わせて歌うこと、初めはピアノなどの楽器伴奏を使用しないことが挙げられているが、その歌唱活動の選曲として、歌いやすい「わらべうた」「遊び歌」を推奨している。乳幼児期に母親との自然な遊びの応答の中で自然に体得したものを引き継いで、幼児期に日本語と結びついた自然な音感感覚、音楽的な感性を完全に身に付けることができるのが「わらべうた」であり、遊びを伴わない歌うだけの活動は不自然な声を生む原因となるとも述べている。また、「遊び歌」について、「『遊び歌』は、幼児の好む様々な『遊び』が、そのまま魅力ある『遊び歌』の形となって、まとめられています。『遊び歌』を遊

び、歌うことは、幼児の心身が求めている『遊び』を満足させながら、『歌う』こと、身体を動かすことなどの音楽的な表現力を、総合的にそだてることができるわけです。」と述べている⁵⁾。後藤田の考えるわらべうたや遊び歌の中で発達させることのできる能力は、コミュニケーション能力、人間関係における対応能力、音楽の拍子感やリズム感、自然な歌い方である。ただし、後藤田は「遊び」に結びついた素材についても、幼児の成長・発達との関連を考慮して「遊び能力」を育て発達させるものを注意深く選ぶようにと述べている。後藤田によると、好ましい遊び歌は以下のとおりである。

- ① 3歳～4歳の年少児には、簡単な「手遊び」のほか、身体全体を使つての「模倣遊び」が最も重要である。
- ② 4歳～5歳の年中児には、年少児向きのものから、もう少し、内容の豊かな「模倣遊び」を中心にはなるが、さらに、簡単な「役割遊び」を選ぶようにする。
- ③ 5歳～6歳の年長児には、年少児、年中児向きのを継続・発展させながら、次第に内容の豊かな、そして変化のある「役割遊び」に重点を移していく。

具体的にどのような遊び歌が適しているかと後藤田が考えていたのかについてまでは述べられていなかったため、今後文献研究を進め、後藤田の考えていた好ましい遊び歌について明らかにしたい。

後藤田はまた、「幼児の発達過程とリズム」という原稿の中で、「ケンパで遊ぼう」という遊び歌を通して子どもの発達と遊び歌についての考察を行っている。元々幼稚園・保育園向け番組「なかよしリズム」の中で生まれた「ケンパで遊ぼう」（阪田寛夫作詞・越部信義作曲）という遊び歌がある。1968年から「おかあさんといっしょ」中の「手をつなごう」のコーナーを担当し始めた後藤田は、番組中にこの曲を取り扱うこととなった。全国の4～5歳の子どもたちのところへ行き、子どもたちにケン・ケン・パーを録音した歌に合わせてしてもらおうという内容であったが、歌通りのリズムやテンポでできない子どもが多かったようである。3年あまりかけて様々な試行錯誤や実験を行い、子どもたちが上手にケン・ケン・パーができるようになる指導方法を模索したが、結果として気付いたのが、「ケン・ケン・パー遊び」は4歳児向きではなく、4歳児の身体活動は単純な要素に限られるということであった。後藤田は、自分の制作した番組のレパートリーを含めて、幼児に用意されている遊び歌やリズム遊びのレパートリーがいかに幼児の本質に適切でないものが多いか、発達段階を無視したものであるかに気付いたと述べている。そして「『遊び』こそ『教育』なりといわれるが、大人はその陰で、幼児の発達段階に即した『遊び』をもっと厳しく整理整頓しなければならないのではないか」と問題提起をしている⁶⁾。

本研究を通して、後藤田が一貫して子どもの言語能力や心身の発達、子どもの社会性を身に付けるためには「わらべうた」「遊び歌」が良い教材であると考えていたことが明らかとなった。日本のわらべうたには多くの良さがあるが、児童期に遊ぶための曲があまり存在せ

ず、長い期間に渡ってまでは子どもの発達に深く関わることができているため、外国の歌遊びを日本に紹介することによって小学生以上の子どもたちでも遊ぶことができる遊び歌を普及させたいと考えたようである。現在も保育現場で多く取り入れられている「くまさんくまさん」「山小屋いっけん」「こいぬのビンゴ」などの外国の遊び歌の多くが、後藤田によって発掘された曲であったということは驚きであった。その一方で、後藤田は大人から見て良い「わらべうた」「遊び歌」であっても、子どもの発達年齢に合っていることの重要性を訴えている。今後は、後藤田のこのようなわらべうたに関する研究や音楽教育観が、こどものうたの番組制作にどのように影響を与えたのかについて研究したい。

引用文献

- 1) 堀内敬三、池田弥三郎、谷川俊太郎、山本直純監修「日本の歌唱 第4巻 童謡集」解説、中央公論社、1971
- 2) 後藤田純生「現代のわらべうた」月刊言語 12、大修館書店、1979、pp.6
- 3) 浜野政雄・西園芳信・山本文茂編「子どもと音楽 第3巻 子どもの生活と音楽」同朋舎、1987、pp.133-163
- 4) 後藤田純生、財団法人幼児開発協会企画・監修「原語で歌う 世界の子守り歌とわらべうた」CD解説、ソニーミュージック、1992
- 5) 後藤田純生「幼児の歌と遊び」1998
- 6) 後藤田純生「幼児の発達過程とリズムー「ケンパで遊ぼう」の教えるものー」

参考文献

- ・ 後藤田純生「わが国とアジア近隣諸国における〈わらべうた〉の比較研究～今後の調査、研究の方法をめぐる提案を含めて～」
- ・ 後藤田純生「日本のわらべうた 20～楽譜、歌詞、録音、遊び方の説明、背景などの解説を添えて」
- ・ Sumio Gotoda “Japanese Traditional Children’s Songs and Games”
- ・ 後藤田純生「子どもの歌・わらべうた・遊び もういちど見直してみよう！」
- ・ 後藤田純生「世界の『あそびうた』は日本を駆けめぐる～わが国に渡来した『世界の遊び歌』の系譜～」
- ・ 後藤田純生「子どもにとって歌あそびの意義」国立音大幼教セミナー、2003

[View on Music Education from the Study of Children's Songs and Play Songs by Sumio Gotoda]

[Ayaka, NAKAMURA・鹿児島女子短期大学児童教育学科准教授・幼児音楽教育学専攻]

[現在の研究テーマ：幼児の音楽表現活動]